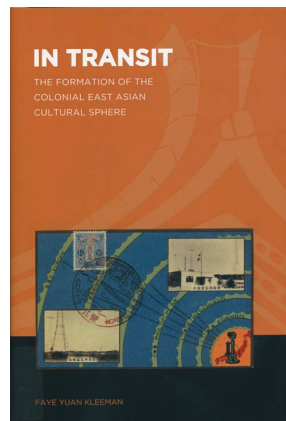


フエイ・阮・クリーマン 著

『通り過ぎるなかで——植民期東アジア文化の場所の構図』

Faye Yuan Kleeman. *In Transit: The Formation of the Colonial East Asian Cultural Sphere*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2014.

中川 成美



ナショナリズムを越えた複数文化の共存という「理想」は、近代汎ヨーロッパ主義にみられるように、ユマニテの実践という使命を基底に抱え込み、やがてEC（欧州諸共同体）やEU（欧州連合）という経済共同機構の理論的根拠にも援用されていくことになった。しかしながら、イギリスのEU脱退が国民投票によって決定されたように、こうした共同体の「理想」が、「国民」の権

利・権益と背馳した時に巻き起こる、思いのほか強烈なナショナルなものへの傾斜は、国民国家という近代以降の世界システムが、いかに強靱に「国民」を形成し、無意識な集団認識・集合意識を導き出していくかを証明している。この二極の揺れをホミ・K・バーバは「忘却こそが、国民になろうとする意志が分節化さ

れるその瞬間なのだから」（『ナラティヴの権利』磯前順一／ダニエル・ガリモア訳、みすず書房、二〇〇九年）という言葉で表している。つまり、国民化の強制のたびに起こる「暴力」や「権力」の介在、不当な越権を「忘却」して、あえて国民化しようとするメンタリティの強度にバーバは注目したのである。

フエイ・クリーマン氏の本書は、ポスト・コロニアル理論の浸透によって生まれた世界システムへの「根本的疑義の提出」に強くコミットしながら、なお東アジアという場所（sphere）の「特殊性」を真正面から取り上げた研究書である。氏は前著 *Under an Imperial Sun*（University of Hawai'i Press, 2003；邦訳『大日本帝国のクローール』林ゆう子訳、慶應義塾大学出版、二〇〇七年）で、彼女自身

の父祖の地・台湾の植民地期を対象に、そこに営まれた日本語文学について犀利な分析を試みた。帝国という版図のなかで、どのように日本語が宗主国の言語となつて被植民地の人々の心性に食い込んでいったかをクリーマン氏は叙述したが、この方法の重要性に、私は特に留意したい。先のバーバの言葉は、複数文化主義か、単一文化主義（国民文化主義）かという選択にある落とし穴を指摘している。一見、対立しているかのように見えるこの二極は、実は相補的なものであり、どちらにしても主権を担う文化や言語の専横的な支配によつて構造は決定されてしまうことを、見落としてしまう危険を内包しているのだ。その意味で、本書によつてクリーマン氏が明らかにしようとする「大東亜共栄圏」の両義性こそは、西欧帝国主義によつてもたらされた他国・他者への欲望を母胎に現出した、壮大な東アジアにおける「忘却」のデイスコースとして感知されていかなければならないであろう。

本書の構成は以下のとおりである。拙訳にて目次を挙げる。

第1部 友達、それとも敵…汎アジア主義の初期位相

第1章 宮崎滔天…最後の革命的叛逆者

第2章 河原操子…娘、教師、良き妻

第2部 自分の語り、国家の語り

第3章 歴史、記憶、そして（自己）伝記

第4章 ジェンダー、エスニシティ、帝国のスペクタクル

第3部 欲望の版図制作と自己認識

第5章 植民地の女性と原住民族…真杉静枝と坂口禰子

第6章 帝国の舞踏手

第1部でクリーマン氏は近代への突入とともに日本が近接する東アジアへもつた欲望の諸相を詳述しながら、それぞれが持つ固有の特色を明らかにしていく。宮崎滔天が唱える「アジア主義」が、西欧帝国主義、そして西欧植民地主義への対抗として想起されていることをクリーマン氏は認めながら、中国、朝鮮半島との連携の主たる担い手としての「日本」のリーダーシップを疑わない滔天の矛盾を指摘し、なおこの滔天のロマンチズムに支えられた汎アジア主義、大アジア主義の夢想とアジア近代化の将来構想を融合させる論理がもつた意味を問いかける。それは極めて現実的な問題でありながら、一方にそうした「革命」の夢をもたらず装置となつて機能したことを忘れてはならないであろう。

日露戦争はその意味で本格的な西欧帝国主義との戦いであった。内蒙古の女学校に赴任した河原操子は、中国に潜入した諜報機関と連携をもつてスパイとなつた女性である。彼女の活動が愛国に根差していることは疑いないが、同時にアジアの危急を救済しようとする「誠意」にも満ちていたことを、クリーマン氏は指摘し

ている。しかしながら河原が当時において受けた高度な西欧的教  
育が、滔天と同様に日本の近代化への疑いなき信奉によって、屈  
折した「日本主義」を形成していったことをクリーマン氏は挙げ  
ながら、「脱亜入欧」という屈辱的な近代化への行程を覆す／顛倒  
させる論理の形成過程を、滔天、河原の軌跡から探索した。

第2部でクリーマン氏は帝国の政策に加担・協力した女性たち  
に視点を注いでいる。それは一方に手ひどい犠牲となった女性た  
ちへの注目であるが、ここでもその一方に断罪できない両義的な  
評価を対象として論を展開した。第3章で朝鮮・李王家の皇太子  
妃となった梨本宮方子、愛新覚羅溥儀の弟・溥傑の妃となった嵯  
峨浩の持った意味が考察されているが、大正期から昭和期にかけ  
ての日本の帝国主義は、中国、朝鮮における王家との血の連携を  
図ったという点において、身体が帝国化され、なおその身体が生  
み出す（再生産する）混淆した血の現出に、帝国の複数文化主義的  
複合エスニシティ・イメージの産出の意図があつたことを剝出し  
た。彼女らは帝国の中心的な機能を担いながら、おのおのの王家  
にとつては著しく周縁的な存在として見られていたことが、この  
帝国のイメージ生産の虚偽を証明している。しかし、この身体の  
植民地化、帝国化は、帝国イメージの生産、存続に必須の要素で  
あつた。

第4章でクリーマン氏は川島芳子、李香蘭（山口淑子）を対象に

このイメージ生産のメカニズムを解明した。彼女らもつた絶大  
な波及効果が何故もたらされたかについて、例えば川島の「私の  
体は中国の血と日本の精神でできている」という発言、また李香  
蘭の「中国は私の故郷 (hometown)、日本は私の父祖の地 (fatherland)」  
という発言から、彼女らもつた曖昧な位置の自認に注目した。  
中心にありながら周縁的、日本でも中国でもありながら同時にそ  
のどちらでもない不可思議な自己規定に、帝国の両義的な側面に  
眼を向けているのだ。

植民地主義がもたらす文化の混淆は、それまでにない新たな身  
体やアイデンティティ認知を産出する。植民地主義は宗主国への  
恭順を強制しながらも、一方にはその混淆した社会・文化状況を  
「特色」としてプロパガンダする。十九世紀末から西欧を中心に展  
開した植民地博覧会には、むしろそのサベージ性やエスニシテイ  
性を強調する傾向があることはその証左である。帝国の版図に入  
れ込みながら、一方に宗主国と同等の権利も敬意も与えないのだ  
から、当然そのそもそもの「国民性」や「国民文化」を侮蔑的に  
担保し、継続させるという政策は、世界中の植民地で行われてき  
た政策である。その時にそのどちらの文化にも精通し、あるいは  
象徴的に具現する存在が要求される。川島芳子も李香蘭も、その  
帝国のイメージ生産に用いられ、結果としてどちらにも所属でき  
ない身体を置き去りにするということである。

第5章で台湾に眼を向け、クリーマン氏は真杉静枝と坂口禊子に焦点を当てる。この植民地・台湾を描く二人の女性作家が期せずして台湾原住民族へ注いだ視線は何であったのだろうか？ 帝国からも別置される原住民族は自由な存在でもある。そうした自由さの希求は、女性自身の自由さへの希求と通じ合っていくことに、クリーマン氏は言及している。ここで氏は津島佑子の『あまりに野蛮な』（講談社、二〇〇八年）を、この二人の植民地を描く女性作家の作品と交錯させ、「野蛮」がもつ意味の両義性に注目している。もちろん、現実には原住民族は帝国・日本から手ひどい弾圧を加えられていたのだが、ここで比喩的に用いられる「野蛮」が、ジェンダーの不当な配置を顛倒させるものとして夢想されたという見解は、深く肯くことができる。

第6章は舞踏家・石井漠と「半島の舞姫」崔承喜の関係を中軸に、世界的に活躍した崔がもつエキゾテイズムの生産に石井が持った役割を考察している。「朝鮮ダンス」の特殊性を強調しながらも、実はそこには伝統主義を脱却したモダニティが深く関わっていた。この倒錯した状況は、まさしく「伝統の発明」なのだが、のちに崔が北朝鮮に渡りダンスメソッドを確立したさい、そのモダニティが理由となって粛清された。この悲劇的な舞踏家の生涯は、象徴的に帝国の文化の両義的な曖昧さを物語ることになろう。中心と周縁が目まぐるしく交代しながら転回していく帝国主義の

情景が、今の問題にも波及していることにクリーマン氏は触れているが、東アジアにおける文化的覇権の相克が容易には解消・解決されえない残滓となつて存在していることにも、本書によって深く記銘したことを付け加えておきたい。

東アジアにフラッシュバックのように起こっている文化一國主義、国民主義の跋扈のなかで、本書が果たす役割は大きい。文化の多層性・多層性を主張することは、文化の独自性・特殊性を主張するのと同様に、根拠なき言説の積み重ねの結果の現象にすぎない。中心にも周縁にも位置されないままに「忘却」されてしまった文化テキストを、これから私たちは探していかなければならない。本書はまさしくその目的を果敢に実行した書なのである。